

生命倫理政策研が発足

再生医療、臓器移植や新薬治験など生命医科学と社会のかかわりを調査研究する「生命倫理政策研究会」が発足した。これらのテーマに取り組んできた株式会社科学技術文明研究所が3月に解散、同研究所に所属していた科学政策論研究者の櫛島（ぬでしま）次郎氏（46）らが研究会をつくった。独立の民間シンクタンクとして政策提言し、将来はNPO法人化を目指す。7月7日、共立薬科大（東京都港区）で記念シンポジウムを開催する。

あらゆる細胞に分化する能力を持ち再生医療の切り札として研究が活発化する胚（はい）性幹細胞は、作成に受精卵が必要で慎重な扱いが求められている。また、愛媛県などで病気腎移植が発覚し、

患者と医師の関係が改めて問われた。近年、生命科学や医学と社会の間に起こる問題がクローズアップされている。

科学技術文明研究所は、これらのテーマに取り組んできたが解散により、民間独自の研究の場が事実上なくなった。櫛島氏は「再生医療でも病気腎移植でも、原点は実験的医療の対象となる人の保護だ。生命倫理は科学研究の不可分の一部であるべきだ。まずは、臨床研究の基盤となる規範を明確にする法づくりを、国会や医学界などに提言していく」と話す。

問い合わせは電子メール（kinmokusei@mbf.nifty.com）で。

【田中泰義】

◎ 毎 日 新 聞 ◎

2007年（平成19年）6月6日（水曜日）